



杉山 彰

第2章 同時共時

- 1、現実人間と仮想人間と、そしてもう一人の人間。
- 2、もう一人の人間は、点人間であり、創造人間である。
- 3、創造人間が生まれるのは必然であるが、いつ生まれるかは偶然である。

1、現実人間と仮想人間と、そしてもう一人の人間。

とにもかくにも、人間はこの地球において、寄生種としての本分をどこかに置き忘れてしまったかのような振る舞いを見せるようになってしまったのである。そして人間は、この地球に対して、まぎれもなく寄生種ではあるが、人間は、じつは植物に対しても寄生種であり、さらには蠅や蚊などの昆虫に対しても寄生種であり、細菌やバクテリアに対しても、同時共時に寄生種なのである。決して宿主の地位には存在していないのである。その根拠は、一つには、人間は、この地球

に存在するすべての有機化合物の中で、最も後で発生した有機化合物なのである。そしてもう一つは、人間がこの地球上から存在を無くしても、消滅しても、地球はもとより、この地球に存在するすべての有機化合物、さらには無機化合物に至るまで、何一つとして困らないのである。変わりなく存在し続けるのである。

その逆に、前述した宿主たちの、一つでもこの地球から消滅してしまったらどうなるだろうか。おそらく人間は、その瞬間から消滅への道を描み始めざるを得ない運命と対峙することになるのは間違いない。

人間はウィルスを除いて、この地球上に存在する唯一の寄生種であるといってもいい。しかし、その唯一の寄生種である人間が地球上での覇者としての権力を手にしてしまったということも紛れもない事実である。覇者としての事実は、この地球上に存在する、すべての有機化合物、無機化合物の生殺与奪の執行者としての地位を確立してしまったことである。この時点において、本文の課題である「人間と夢」というテーマは、「夢」は人間にとって生きる糧であり、新しい世界を具現化させる万能の力を与えてくれるものであるといった、「夢」の「夢」を論じることの枠を飛び越えて、人間にとっての「夢」が持つ本質を解きあかしてみようとする試みにワープするのである。

2、もう一人の人間は、点人間であり、創造人間である。

一人の人間には、夢を見ている自分と、夢の中に存在させている自分が共生共存しているとする仮説が、本文の始まりであった。しかし、その共生共存の仮説は仮説として、さらに一人の人間には、じつはもう一人の自分である、3人目の人間が同時共時に存在しているという、新たな仮説を追加して本文を相転移させたい。もちろん、その3人目の人間は宿主と寄生種との関係

にはあてはまらない人間である。当然、どちらが先に存在したかとか、一方を消滅させたら、他方はどうなるとかといった定義にもあてはまらない。その人間は、人間の中に沈黙している人間である。夢を見る現実人間でも、夢の中に存在する仮想人間でもなく、ただひたすら沈黙している人間である。強いて言うならば、それは点のような人間でもあるといえる。点のようなものであるから、大きさもなければ、広がりもない。ただ位置を決めているだけの点人間であるといえる。では、この点人間はどこから生まれてきたのだろうか。何もない無から泡のようにポコッと浮かび上がってきたのだろうか。

<図4>



じつは、点人間は、現実人間と仮想人間から発生したのである。つまり、点人間は、夢を見ている自分と、夢の中に存在させている自分との間から発生してきた、もう一人の自分なのである。夢とは、じつに便利なもので、夢を見ることができる人間は一人しかいないが、夢の中には、自

分とは違う人間を、次々と登場させることができるのである。これはもう無限とも言えるぐらいの自由自在の想像世界である。但し、想像しただけの世界であって、決して創造してできた世界ではない。点人間は、その想像した世界からオギャーといって生まれてくる創造人間になる前の人間である。例えて言うならば、女性の子宮の中でポツンと着床した受精卵みたいな点のようなものでもある。膣で受精して子宮に着床してへその緒をつけた胎児のようでもある。

その点のような胎児が<10月10日>後に、果たして創造人間として生まれてくるか、こないかは……。神のみぞ知る事柄でもある。ただ、創造人間は点人間になる段階を踏まなければ、絶対に誕生しないということだけは明白である。

論旨が横道にそれたようなので本論に戻すことにする。

現実人間が夢見た、その夢を希望に変えるためには、まず「夢」を点にして位置を決めることが不可欠である。点人間にすることである。点人間にするために、現実人間が最終的にしなければならないのは文字にすることである。「夢」を、現実の夢にする第一歩が、例え言葉にしたことであっても、最終的には紙に書いて記述しなければ位置が決まらないのである。例えば、企画書にして四方八方を固めて枠組みを決めなければならないのである。そしてその枠組みが決まった企画書の冒頭に記述する文字は、名前をつけることである。じつは、何事も、名前をつけなければ始まらないのである。そして、その名前をつける始まりの文字を記述する始まり点が【点】であり、それが点人間の姿なのである。

希望は託すものである。紙に託すものである。紙に書かれた希望は、自分以外の多くの現実人間の手に渡り、目に止まり、やがて目に止めた現実人間と共生している仮想人間に届くのであ

る。言うまでもなく、仮想人間の使命と一緒に共生している現実人間に夢を与え続けることである。つまり、想像の世界から発生した点人間が、あたかもメッセンジャー(エイジェンシー)となつて、夢を同じくする仲間を募るのである。コミュニケーションするのである。仲間が集まったら今度は冒険である。チャレンジである。しかし、この段階においても、創造人間が必ずしも誕生するとは限らない。しかし、いつか誕生することは間違いない事実である。夢が浮かんだら、紙に書いて、仲間を集めてチャレンジする。その繰り返しがあつて初めて、現実人間と仮想人間との間に点人間を発生させ、やがて創造人間として誕生させるチャンスを手にすることができるのである。

夢は希望に託され、仲間を募る力に変わる。仲間が集えばチャレンジが始まる。チャレンジが始まれば、「夢」は芽をふき、幹となり、やがて花を咲かせ、実を結ぶのである。実を結んだ果実はやがて種に還り、今度は、その種が夢を受け継ぎ、次の夢を育て、広げていくのである。輪廻転成とも言える。

このようにして、とにもかくにも夢が実現してしまったら、それ以前に、夢を見ていた自分はどうなるのだろうか。簡単なことである。夢の中に存在させていた自分が、この世に創造人間としてデビューして、実在してしまっただけのことである。その瞬間、今まで夢を見ていた自分はこの世から消滅してしまい、今度は、新しくこの世にデビューした創造人間が、再び現実人間と仮想人間として共生し合つて、同じように夢を見る自分になるのである。この世から消滅してしまった自分は、なんと新しくデビューした創造人間の心の中に点のようになって沈黙するのである。但し、この点である人間は、点であるから 大きさも広がりもなく、ただ位置を決めているだけである。何の位置を決めているか。新しくデビューした自分の、この世でのスタートにあたっての心構

えの起点を決める位置となるのである。「よし、ヤルゾ！」というアクセルをふかし続けるゾ、というヤル気である。そして同時共時に、以前に夢を見ていた自分の終点を決めている位置ともなるのである。「待てよ、前にこんな失敗があったゾ！」という、ブレーキを踏むこともあるゾ、というヤメル気である。

3、創造人間が生まれるのは必然であるが、いつ生まれるかは偶然である。

現実人間と仮想人間との間で想像され、創造されて生まれてきた創造人間は、想像さえすればポコッと生まれてくるのだろうか。答は、イエスでありノーであり、ノーでありイエスであるという、不確定性原理の舞台である宇宙のマクロ世界にワープしてしまうのである。

<図5>



そしてさらに、生まれてくるのは必然であるがいつ生まれるかは偶然であるという答は、J・C・モノーが、彼の著書である〈偶然と必然〉で記述した舞台である、遺伝子のマイクロ世界に同時同時にワープしてしまうのである。何やら「夢」とは、色即是空、空即是色であり、「夢」とは、所詮そのようなものであるという『般若心経』の教えが聞こえてきそうである。

ともかくにも、創造人間が生まれてくる先は、現実人間と仮想人間との共生関係によるものであるということは紛れもない事実である。生まれてくる仕組みは、仮想人間の【意志】によって与えられた夢が、現実人間の《意識》となって想像世界がつくられ、そこではありとあらゆる人間が夢として浮かんで消え、消えては浮かんでくる状態になる。ここまでも紛れもない事実である。問題は次である。つまり、この段階までは想像世界の出来事であり、創造世界の出来事ではないのである。想像世界での出来事には、重さがない。フワフワと現実人間の体の中を、点になるでもなく位置を決めるでもなく、徘徊するだけで形がない。形も重さもないから、じつは時間もないのである。難しく言うならば、この状態は、かの有名なプランクスケール以前の、重力も電磁力も弱い力も強い力も全部が分離することなく混沌となったままの状態であるとも言える。

当然のことであるが、この状態で徘徊している「夢」と、その「夢」が存在する世界は、かの有名なアインシュタインの相対性理論の公式である $E=MC^2$ が規定しようとした世界とはまったく異なる世界であり、対象外の出来事でもある。従って、「夢」が、この世の世界の対象外のままの状態では、「夢」が現実人間の《意識》となって現実人間の体の中を徘徊し続け、現実人間にジワジワと作用し始めるのである。どう作用するか。アレコレ、コレアレと現実人間の頭と体に、まるで囁くかのように作用・反作用するのである。どうしよう、ああしよう、こうしよう、と囁くかのような「正夢・負夢」とゆらがせるのである。ゆらいでいる「夢」は、点となって現実人間の中で位置を決めることができないから、ゆるぎない「夢」とはならないのである。さらには、夢を見続けて

いる自分との終点も、創造人間となって新しくスタートするための起点も定めることができないのである。折り合いがつかないのである。

折り合いがつかない状態が延々と続くと、人間は疲れてしまうのである。疲れている人間は、何かに憑かれているように見られてしまう人間でもある。そして、そのような状態が長く続くと、人間は、創造人間どころか、浮遊人間になってしまうのである。この浮遊人間は、地に足が着いていないよと言われ続け、最後には、誇大妄想人間であるとレッテルを貼られてしまうことも多々ある。